

メサイアを書くまでのヘンデル

ドイツの小さな街で生まれ、イタリアで修行したのち、イギリスのロンドンで人生の半分を過ごした、ゲオルグ・フリードリヒ・ヘンデル (1685～1759)。当時は、同世代のヨハン・ゼバスティアン・バッハ (1685～1750) よりも人気があったほどの作曲家でしたが、その道のりは決して易しいものではありませんでした。

音楽とは関係ない家柄に生まれ、医者父の厳しい意向により、17歳の時に、地元で大学に入学し、法律を学びました。しかし、幼少期から音楽が好きだったヘンデルは、両親に秘密でクラヴィコード (小さな音が出る小型の鍵盤楽器) を手に入れ、家族全員が寝静まってから、屋根裏でコソコソと練習していたと言われています。こうして音楽に対しての情熱を捨てきれなかったヘンデルは翌年に大学を中退、ハレ大聖堂のオルガニストとしての仕事を皮切りに、まず北ヨーロッパを望む港町ハンブルク、そして太陽の眩しい南ヨーロッパのイタリア各地を巡り、なんと約8年間にわたる武者修行を行います。

その後、25歳で北ドイツのハノーファーで宮廷楽長を務めます。その間、1711年2月に自作のオペラ『リナルド』を上演するべくロンドンを訪ねますが、これが思ったよりも成功を収め、その2年後にイギリスに移住します。

新天地ロンドンに移ったヘンデル。当時流行していた、イタリア風のオペラを専門的に書く作曲家としてだけでなく、演奏家として、さらにはオペラを定期的演奏するための企業を設立し、マネージャーとしても活動を行います。イギリス国籍も取得し、順風満帆に見えたヘンデルの人生。しかし、イタリア風オペラの流行にかげりが見え、外国人であるヘンデルに対しての風当たりも強くなり、歌手達とも対立、経営不振となった会社も倒産してしまいます。こうした多大なストレスが原因で脳卒中となったヘンデルは、なんと52歳の時に右半身が不随になってしまいます。

こうして失意のどん底にあり、一線から身を退いたヘンデルの元へ、友人のチャールズ・ジェネズという男がやってきます。56歳(1741年)、夏の出来事です。

オラトリオ『メサイア』の作曲と初演

ジェネズは、生きる目標を失い、演奏会の予定もないと話すヘンデルに、イエスの生涯を基にした『メサイア』の台本を渡します。そして、「この台本で作曲してほしい」と伝えたと言われています。

ヘンデルは、自分の置かれた状況も相まってか、この台本に感動します。早速作曲を

始めるのですが、台本を手にして部屋に閉じこもったヘンデルは、食事にもほぼ手をつけず、睡眠も二の次、そして台本に感動のあまり、涙を流しながら作曲したとも言われています。ヘンデルが精神的にかなり辛い状況にいたことがわかります。さらにアイルランド総督から、ヘンデルのもとに慈善演奏会での演奏依頼が来ます。ここで火のついたヘンデルは、なんとたった24日で『メサイア』全曲を完成させてしまいます。驚きの速さです……。

翌1742年4月13日、アイルランドのダブリンにて『メサイア』の初演が行われます。そんなアイルランドは、前年の寒波による大飢饉で人口の2割を失っており、かなり厳しい情勢だったことが伝えられていますが、リハーサルの段階からすでに注目度は高く、初演は大成功、地元紙にも「雄大で荘厳で感動的な歌詞に付けられた音楽の気品、スケールの大きさ、そして込められた愛情は、聴き手の心と耳をすっかり魅了した」と絶賛されました。そしてこの演奏会の収益の一部は、慈善事業へ寄付されたのです。

この成功に生きる希望を再び見出したヘンデルは、背中を押されるように、辛い思い出の蘇るロンドンでも『メサイア』を演奏することを決意。1743年に催された、最初のロンドンでの演奏会こそうまくいかなかったものの、ヘンデル自身も創設の際に出資したロンドン市内の捨子養育院で開かれた『メサイア』の再演は大成功を収め、親に捨てられてしまった子供たちも『メサイア』のおかげで幸せに生活することができたそうです。

日本語では“救世主”と訳される『メサイア』。まさに、飢饉で辛い思いをしていたダブリンの聴衆、育児放棄された恵まれない子供たち、そして挫折が重なり失意のどん底にあったヘンデルにとってのメサイア(救世主)となったのです。

メサイアについて

『メサイア』はオラトリオという音楽に分類されますが、オラトリオとは、“舞台のない物語付き音楽”です。16世紀ごろから、キリスト教にまつわる話をわかりやすく伝えるための音楽として作られるようになりました。この『メサイア』も例に漏れず、イエスの生涯について分かりやすく構成立てられた、舞台のない音楽として書かれました。舞台のない音楽の良さとは、視覚的情報が省かれていることで、より歌詞の意味を噛み砕く余裕が聴き手に与えられていることでしょう。その『メサイア』の大きな特徴として、以下の2つを挙げることができます。

① 歌詞の内容

『メサイア』の台本は聖書から抜粋されたものですが、台本を書いたジェネズは、もともと音楽好きのシェイクスピア研究家で、簡潔ながらも斬新な、読み応えのある台本を

作りました。その内容は、ナレーションのように第三者目線で歌われます。まさに語り部といってもいいでしょう。このように、第三者目線でイエスの生涯を伝える台本であることにより、聴衆も歌い手と同じ目線からイエスの生涯を追体験することができます。

② 音楽と構成のわかりやすさ

楽器の編成は大きすぎず、コンパクトにまとめられています。しかし、メサイアを作曲するまで約40作品にのぼるオペラを書いたヘンデルだからこそ、それぞれの楽器の役割を存分に活かし、鮮やかな情景を描写しています。

『メサイア』の構成は、3部に分かれます。第1部の救世主(イエス)生誕の預言とイエスの降誕、第2部はイエスの受難と復活、第3部はイエスの再臨と死に対する勝利が語られます。音楽も、その物語の展開に沿ったように、明確に雰囲気が変わります。

最初のシンフォニーは、ヘンデルの友人マッテゾン曰く「絶望的な感情に満ちた調」だとされるホ短調を使用することで、イエスに待ち受ける受難を予感させます。そのシンフォニーを除く第1部では、イエスの誕生を歌う第11番「私達のために」を中心に、イエスの誕生を祝うかのような晴れやかで明るい曲想の音楽が並びます。

第2部の前半では、陰鬱さを感じさせる音楽で受難が表されます。第26番から第28番にかけて、イエスが命を落としたことが歌われた後、第29番「だが、あなたは彼の魂を」から、復活の喜びを感じさせるような明るい音楽にガラッと変わります。そして第39番「ハレルヤ」で、神とイエスが高らかに讃えられ、大合唱のうちに第2部が幕を閉じます。

続く第3部は厳かな雰囲気と共に、死への勝利が讃えられます。特に第43番「トランペットが鳴り響くと」や最後の合唱は、その喜ばしさから祝祭的な雰囲気が漂っています。

ヘンデルの作品へのこだわりは、細部にも見られます。特に第3番「全ての谷は高く」では、山や谷を表すような上昇と下降音型が繰り返され、第6番「だが彼の到来する日に」では、“彼は精錬する者の火のような方”という歌詞に合わせて、火がついたように激しい音楽になり、細かい音符が刻まれます。さらには第20番「彼は蔑まれ、人々に見捨てられ」の中間部では、イエスに対する鞭打ちの様子がオーケストラの符点によって表されているのです。

オペラを専門に作曲し、様々な作曲語法の引き出しを持ち合わせていたヘンデルだからこそ書けた、誰にも分かりやすく、かつ効果的な作品『メサイア』。作曲者自身をはじめとした、当時絶望の淵にあった人々を救った『メサイア』を通して、ぜひイエスの生涯を追体験してみましょう！